

# 朝日教育フォーラム「グローバル人材の育成と活用」

朝日教育フォーラム「グローバル人材の育成と活用」(主催・朝日新聞社、特別協賛・学校法人河合塾、後援・経済産業省)が1日、東京・有楽町朝日ホールで開かれた。朝日新聞教育総合センター発足1年の記念イベントで、東京大学総長・浜田純一氏、慶応義塾長・清家篤氏、関西学院大学長・井上琢智氏、ジャーナリストの池上彰氏らが参加し、世界で活躍できる人づくりや大学の国際化などについて議論を交わした。

## 自分の頭で考える

### 基調講演



会場では熱心にメモを取る参加者の姿が目立った



東京大学総長

浜田純一氏

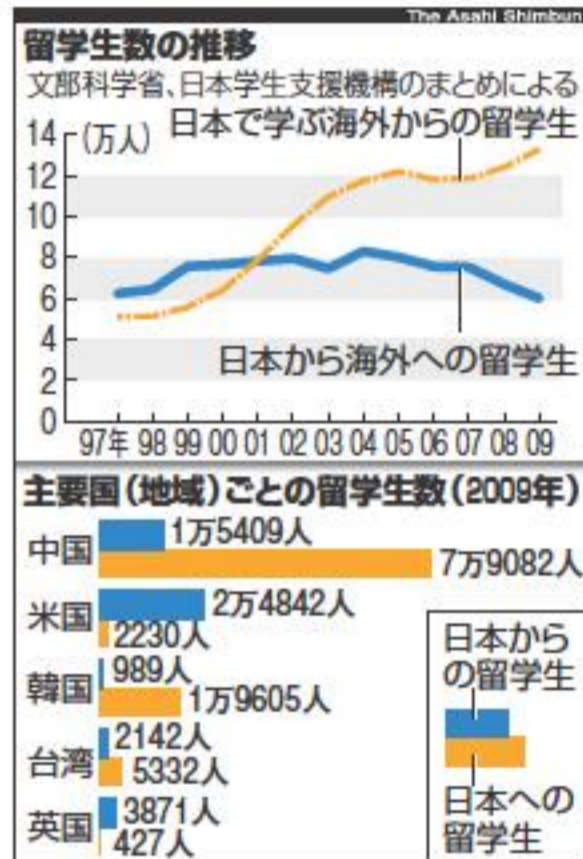
### 異質取り込み自らの力に

「よりグローバルに、よき受けとめる。世界や社会の持つ多様性を自らの力にする能動的な姿勢が大切だ。それを持続するには当然、精神的なたくましさも求められる。」

グローバル時代に最も必要な力とは、自分とは異なる生活や様々な価値観とぶつかり合い、異質なものを自分の中に取り込んでいく力だ。単に英語などの外国語ができた、世界について知っていいれば良いというわけではない。違った価値観に触れ、反発し、あるいは

「よりグローバルに、よき受けとめる。世界や社会の持つ多様性を自らの力にする能動的な姿勢が大切だ。それを持続するには当然、精神的なたくましさも求められる。」

の中で生み出された知識や知恵を吸収していく。大学でも模索をしていく。知識を教えるだけでなく、一方向の大教室での講義が効果がいい。討議型の授業は、多様な意見とぶつかり合いながら自分を鍛えることができるが、事前の学習が必要だ。その両方を組み合わせ、高い知的水準と新しい多様性に向き合う、そういった学生を育てたい。(構成・杉本宏)



### 学生は論理の力高めよう



慶応義塾長

清家 篤氏

大学にとって最重要のスキルホルダー(利害関係者)は学生だ。学生の今だけでなく将来にとって最良を考えた教育をすべきだ。本学の理工学部の前身である藤原工業大学の初代工学部長、谷村豊太郎は「すぐに役立つ人間はすぐ役立つたなくなる」と言った。仕事に必要な技能や技術、市場構造は刻々と変化し、今の即戦力はすぐに陳腐化してしまうかもしれない。

学生に身につけてほしいのは、どんなに技術や市場状況が変化してもそのもとで有能であり続ける力。課題を見極め、仮説を立て、客観的な方法で検証し、結論を導く。つまり、自分の頭で考えること。これは学問の作法にほかならない。もう一つは、グローバル化への対応。言語や文化的背景の異なる人々とコミュニケーションをとるには、外国語と同時に、論理の力を高めることが大切で、それは学問で得られる。福沢諭吉は明治維新前後の大変革の時代に最も頼りになるのは学問だと知っていた。学生にはしっかりと学問をしてもらいたい。大学は学問によって社会に貢献する組織だ。学問を通じて自分の頭で考え、異文化の中でも仕事や生活ができる学生を育てることが、大学の最大の役割だろう。(構成・水野雅恵)

### 社会人の「基礎力」磨く

グローバル人材の育成に向けて、政府も動き出している。経済産業省は、若手社会人、学生を海外の企業などに派遣し、ビジネス体験を通じて、異文化対応能力を向上させる事業を始め、12年度はインドネシア、ペトナム、タイなど10カ国に86人を派遣。旅費や滞在費用などを支給する。同省経済産業政策局参事官の奈須野太氏は「韓国は、国と企業が連携して若手のグローバル人材育成に取り組ん



関西学院大学長

井上琢智氏

### 他人を認める「寛大さ」必要

関西学院は、創設者でアメリカの宣教師だったランパス氏が世界中で学校や病院をつくる活動をしたこともあり、「世界市民」の育成を目指している。キャンパスは当初から、外国人宣教師や日本人の教師の家とまなび舎が一体となって軒を並べ、学生が異文化に自然と触れることができる環境だった。教師らと「垣根なく」一緒に勉強した。私が学生だった40年ほど前に

も同じ体験があり、今もこの精神が息づいている。さらに一人ひとりが個性、才能を発見し自ら育てていくこと、異文化に接し、自らを相対化していくことが大切だ。個人が社会でつながらず、他者を思いやることも忘れてはならない。その際必要となるのが「寛大さ」。自分を認めてもらうには、まず他人を認める度量が肝心だ。

部は今シーズン学生日本一を2年連続達成。勝利に直結する活躍をせずとも、見えないところで仲間貢献した部員を「アンサンブルヒーロー」と呼び称賛している。まさにこの称賛が寛大さの表れであり、スクーリー・フォー・サービス(奉仕のための練達)につながっている。(構成・上島誠司)

### 特別講演



河合塾教育研究部長

谷口哲也氏

### 大学進学ゴールではない

「グローバル人材」の条件は、まず異文化や日本の文化を理解すること。そして自ら問題を発見し、解決する力。さらに「あきらめない」タフさの三つだ。高校や大学は、世界を視野に、知識を教えるだけでなく、知識を活用し物事を考える力を育てる必要がある。場面や役割に応じて、社会的に行動する力も重要だ。私たちはそれを「ジェネリックスキル」と

本「大学」の開発や大学の教育力評価を通じて、受験生に情報を提供し、高校と大学の接続を図っている。その上で、これから世界で活躍する高校生の皆さんには「大学進学がゴールではない」ことをお伝えしたい。人は一生学び続けなければならない。そのために高校と大学で何をどれだけ身につけるか、長いスパンで計画してみよう。(構成・藤田明人)

# 朝日教育フォーラム「グローバル人材の育成と活用」

## 答えは多様にある

### 教養教育 土台になる 浜田氏

パネル討論では、東京工業大学教授でもある池上彰さんがモデレーターを務め、浜田総長、清家塾長、井上学長が活発な議論を交わした。

グローバルに活躍するためのキーワードとなったのが「多様性」。学生たちは、どう学んでいけばいいのか。

浜田総長は「まず勉強しないと始まらない。教養教育が土台になる」と強調。清家塾長も「『正解』がある高校までの勉強と異なり、大学の学問の多くは答えが多様な性格を持つてい

ることをせひ学んで欲しい」と応じた。井上学長は「先生の言ったことをそのまま答案に書くより、論理的に打破した方が高く評価されるのが大学の教育だ」。池上さんも昨春、東工大での最初の講義で「高校までの教科書は『正しい』ことが書いてあるが、大学はそうではない。最先端の研究をしている故に、正しいかどうか分からないことも講義で出てくる」と語りかけたことを紹介した。

浜田総長は、「日本人の学生がもっと外へ飛び出して欲しい。それが第一」と強調。留学生の受け入れについては、外国人留学生用の住居や奨学金が不足している課題を指摘。その上で東大が東欧、南米、アフリカなどの高校で学生の募集広報を企画するなど、積極的に取り組んでいることを紹介した。

清家塾長は「日本でしか学べない内容を強化することが大切」と述べ、一例として、中国や韓国などの地域研究で高く評価され、海外から研究に来る人が多い慶応大の「東アジア研究所」を挙げた。社会で大きな反響を呼んだ東大の秋入学構想について、浜田総長は「秋入学の場合、一番の問題は、卒業が夏になっても学生がきちんと就職できるのか、という点。企業は、採用が大変になるとしても積極的な声が多いが、国家資格試験の時期まで変えられるかどうかが課題だ」とした。

さらに、「新入生に対して、入学前半年間でできる空白の期間（ギャップタイム）であらかじめ国際経験、社会経験をしてもらう計画をしているが、18歳の学生たちは無駄に過ごしてしまうのではないかと懸念を持つ人もいる」と続けた。

### 入学時期 自由な例も 井上氏

一方で浜田総長は「私自身は、18歳という年齢の人がそんなに頼りないとは思いません。いくらでも可能性があると考えている」と強調した。

池上さんが「春入学と秋入学、両方やればいいのでは」と問うと、「東大では、1、2年生は全員が教

養学部と一緒に幅広い学問を学ぶ。大学の学びのスタートは一緒の方がいい」と述べた。清家塾長は「個人的な考えで、一緒に幅広い学問を学ぶ。大学の学びのスタートは一緒の方がいい」と述べた。清家塾長は「個人的な考

### 「タフ」になるには学問 清家氏

グローバル競争が激しくなる中、「タフな人間」をどう育てるのかについても議論が及んだ。

井上学長は「『タフ』とは自分自身が確立していることだ。自分で何をやるかを決心して、マネジメントができる人。そのために何が欠けているのか学生が自ら気づき、学んで、知的な喜びを味わう過程をサポートするのが大学の役割だ」と話した。



日本人学生と留学生との交流も盛んになっている＝慶応義塾大学提供

また、産業界と連携した人づくりについて、清家塾長は「企業の中でどのような能力が求められるかは、その時々で変わる。大学が、それを学ぶための基礎、自分の頭で考えられる力身につけた人を送り出すことが、産業界に対する大切な貢献だと思う」と述べた。

井上学長は「社会が求める人材は変わらう、ということも自覚しながら、変わらないものをきちんと育てたい。学生も、自分が将来どの分野で貢献できるか、考えながら4年間を過ごして欲しい」と呼びかけた。

(構成・藤田明人)

### 人づくり 大学と社会のキャッチボールで

討論では、「グローバルな人」とは要するに、しっかりとした学問を身につけ、いつの時代にも、どこ場所でも生きていける人なのではないか—ということが見えてきた。

池上さんは「グローバルな人」とは要するに、しっかりとした学問を身につけ、いつの時代にも、どこ場所でも生きていける人なのではないか—ということが見えてきた。



ジャーナリスト 池上彰氏

池上さんは「グローバルな人」とは要するに、しっかりとした学問を身につけ、いつの時代にも、どこ場所でも生きていける人なのではないか—ということが見えてきた。



外国人の先生から学ぶ機会も増えている＝関西学院大学提供

### 総括 討論を振り返って



パネルディスカッションに参加した（左から）池上彰さん、浜田純一東京大学総長、清家篤慶応義塾長、井上琢智関西学院大学長＝山口明夏撮影

### パネル討論